

VITALITE インタビュー

生命力を自在にとらえる

自在研究所

森 政弘

聞き手：佐多保彦 (株)東機質代表取締役社長



森 政弘

1927年、三重県生まれ。名古屋大学卒。東京工業大学名誉教授。自在研究所所長。著書に、『非まじめのすすめ』、『超常識』、『非まじめ思考法』、『矛盾を活かす超発想』、『発想工学のすすめ』等多数。

佐多：自在研究所開設から、今年で24年目を迎えられたそうですね。

森：ええ。1970年3月2日に始まりました。

佐多：きっかけはどんなことですか。

森：新しい技術の開発にあたり、どうも他の人とひっかかるんですね。こうすれば、こんなによいものが出来るということが私には見えているのですが、前例がないとか、突拍子もないということで、新しいものを受け入れない、考え方が自由自在でないんですねえ……。

佐多：理解されないんですか。

森：そうですね。28年も前になりますが、もっと自由自在に物事を考える訓練の場が必要だと思って、それを「自在研究所」と仮称していました。土曜の夕方集まって、時の経つのを忘れてワイワイやりました。本当に頭が作動すると時間を忘れるんですね。柔らかい頭を作る訓練の場だったのです。例えば、「まじめ」も活かし、「不まじめ」も活かすという「非まじめ」がその一例です。

佐多：「自在」の意味はどういうことですか。

森：自在は「みずから在る」とも読みますが、「おのずから在る」とも読みますね。その二つはちょっと考えると全く正反対の世界です。「みずから」とは自分の思うようにやる、全部が自分の世界。「おのずから」とは自然に任せきる、全然自分のない世界。その相反する二つが同居し、合一することが大事なのです。

人間がおのずから、すなわち自然体になりきった時に、その人の中に「みずから在る」という感覚と姿勢がわいてきます。そのことを「おのずから在ることがみずから在る」と言います。逆に、「みずから」という気持がわいた時には、そのことが「おのずから」になっている訳です。

佐多：森先生といえば、ロボット博士として有名ですが。

森：人間が解らないとロボットの設計ができないのです。ロボットの脳を考え出したとたんに非常に難しい壁にぶち当たりました。それは感覚のことです。ロボットはセンサーとコンピューターの組み合わせです。



それによって感じる事ができるのでしょうか。痛いような顔と本当に痛いこととの区別を考えただけでも感覚とは何なのか分からなくなるのではないのでしょうか。設計とは開き直って言えば机上の空論です。ロボットを作っては失敗していくことが、人間を考え人間を理解していくことでした。失敗するとよけいに人間が面白くなっていったんですね。ロボットと人間の「壁」を乗り越えることが「自在」でもある訳なんです。

人間は自然の子供です。だから人間の子供である機械やロボットは自然の孫です。このように見れば自然と人工を対立させません。この世の中、自然でないものはひとつもないわけですね。

佐多：機械と人間の「壁」とおっしゃいましたが、「壁」は医療にもあるんですね。臓器移植は人間の体の一部を、機械の部品のように考えています。

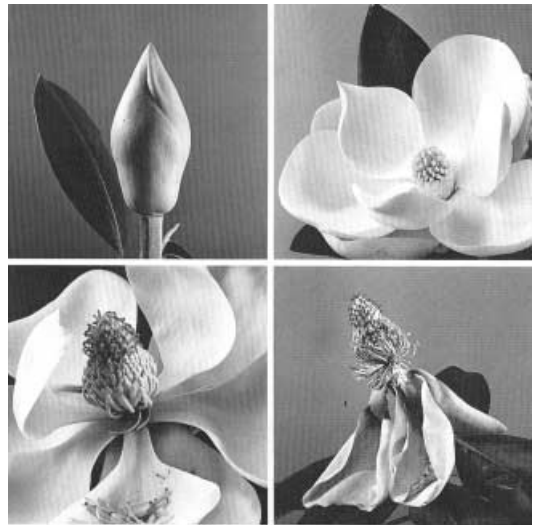
森：そこでは臓器としての「脳」はあっても人間としての「自分」はないですね。

「生から死」ばかりでなく「死から生」をみる必要もあります。それによって解ける問題もあるのです。例えば若葉はちぎらない限り落ちません。ところが秋には枯葉は風がなくても引力だけで落ちますね。あれが人間がひとりでに

VITALITE

インタビュー

(“たいさんぼく泰山木”の写真は石元泰博／写真集『花』より)



死ぬことだと思います。ところが下手をすると今の医学は、葉っぱは永久についているのがいいんだと、生を肯定するあまり死を否定してしまうんですね。それは枯葉を接着剤でくっつけておこうという世界ですね。勿論、ひきちぎるのはいけません。殺生ですから。傷ついた葉は治す、枯葉は人知れず黙って散って行く、これが生も肯定し死も肯定することです。

佐多：先生は「生命力」を、どのように考えていらっしゃるんですか。

森：そうですね。雑草の生命力は素晴らしいですよね。でも、生誕し成長することだけが生命力ではない、死ぬことも「生命力」の現れの一つだと思います。生けるものはいずれ死ぬ。体が段々弱ってダメになっていきます。ものが変化していくことが「生命という力」なんです。花でいえば、咲くときにも生命力を感じるが、散るときにも生命力を感じます。

たいさんぼく泰山木は散り際の凄い花です。咲く時はね、9枚の純白の花びらがまさに清楚。清楚というものを越えたものです。馥郁たる香りがします。それがあつという間に散ります。その純白な花びらが、さーっと茶色にかわるんです。音をたてて散るという感じですね。だから、「生きてるな」と思うんです。ところが最近の、1ヵ月ももつような花は「生きてる」感じはしませんね。造花と何も変わりません。生気がないんですね。散らない事が良いことだという価値観があるとしたらそれは間違いですね。

そのように、どちらかが良くてどちらかが駄目という考えを「二見に墮す」と言います。生が良くて死が駄目とか、善が良くて悪が駄目という考えもそうです。これは善だと思つと、人間は心のコントロールをなくしてやりすぎてしまいます。すると悪になるのです。しかし逆に、悪の中にこそ善が入っているという考えがあります。それが仏教の如来蔵思想なんです。中に「仏性」が入っている。

佐多：先生と仏教の関わりはいつ頃からですか。

森：子供の時から、いつかはちゃんと勉強してみたいと

思っていました。抹香臭いと嫌う人もいますけどね(苦笑)。

私の本も英訳、独訳、蘭訳されましたが、独訳が良く訳されていて、表題は“Die Buddha-Natur in Roboter”となっています。このBuddha-Naturは「仏性」の意味です。欧米のシンクタンクの調査員などがここに来ることもあります。高度経済成長の秘密が隠されていると思うらしいですね。日本人は仏教に対して拒否反応を興す人もいます。文化的に裏目に出ているのです。でも欧米人には逆にフレッシュなんでしょうね。抵抗感がないようです。西洋的な二元論では解けない「壁」にぶち当たっているのです。つまり「合一」がないんですね。

佐多：「合一」と言われますと……………。

森：生まれて育っていくことも、老衰して死んでいくことも同じとみる。同じ大宇宙の変化とみる。そういう正反対の二つを同じと観る考え方を「合一」というのです。「即」ともいいます。

相対立し矛盾しあうものを一つ上のレベルで弁証法的にとらえることを「合一」といってもいいでしょう。西洋の弁証法ですと、「正・反・合」と永遠に続くんですが、これは「迷い」ですね。

仏教で大切なことは、とらわれないということです。生にもとらわれない、死にもとらわれない、あらゆるものにとらわれない。するとどんなものも活かしていけるようになるんですね。

佐多：自灯明という仏語もありますね。

森：そうですね。「自灯明」・「法灯明」といいますが、自分と法(真理)を灯として進めと、こういう考えですよね。

みずからということは仏教の核心です。「仏道を習う」というのは自己を習うなり」「自己を習う」というのは自己を忘るるなり」「自己を忘るる」というのは万法に証せらるるなり(全ての存在が自己である)——道元——ここでいう自己が、myselfなんです。selfがしっかりとすると、人間が全機する。全機すると個性が生きてきます。「生や全機現、死や全機現」といって、生ということも死ということも宇宙の大生命の全機した現れであるということですね。